

第 15 回環境ボランティアリーダー海外研修全体報告書

NPO 法人環境ネットワークくまもと
園田敬子

今回の海外研修で、「環境先進国ドイツ」というキーワードをもとに、多様な角度からその現状を学ばさせていただきました。まだまだきちんとした整理が出来ている状態ではありませんが、研修の興奮冷めやらぬ終了時点での整理と総括です。

1. 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本のボランティアリーダーとして生かせるか。

成田空港出発直前、「真に一人一人が心豊かで幸せな暮らし」と感じられる社会づくりのために、帰国後リーダーとして、どのように行動に移していったらよいか自分の役割を明確にするという使命感をもって研修に出発しました。今まさに研修を終え、そこからやるべき事としていくつか見えてきたものがあります。学びから得た事を次のステップにつなげるべく整理しました。先ず以て取り組みたい事は、目標の可視化と行程のデザイン、そして地域のコンダクターになるという事です。

今回、いち早く持続可能な環境市民社会の構築をきっかけ、実践や事例から大きな成果を生み出しているドイツ NGO 団体から経験則を体系的に学び、プロ意識に精通した多くの環境パイオニアたちの生きた言葉から「組織運営」「人材育成」「広報」「ファンドレイジング」「地域の活動」等等多種多様なカテゴリーへの特効薬をいただけてきました。リーダーとして、この特効薬をどのように処方していくかは、私自身の選択と責任です。これから日本というフィールドで「気づく」→「つながる」→「伝わる」→「巻き込む」ためにリーダーとしてやるべき事を記します。

1. 目標の可視化

自分の団体あるいは自分自身は何のために活動をおこなっているのか、そのことがどう社会に影響を及ぼし変化を起こすのか、ということについて、今回訪問した環境 NGO の NABU や BUND を例にとってみると、目標に対する「明確な意識と戦略」という点で取り組む姿勢に違いがありました。これまで目標に対していかに曖昧かつ漠然と業務をしていたかがわかり、成果に結びつかない負

のスパイラルになっていたか反省させられました。BUND では活動において、自分たちのミッションを実現するために、最終、政治にまで踏み込んでいくという強い意志が団体全体に浸透し、活動に活かされ、その上でタイムラインを引くことで、行動に責任を持ち成果を生み出し、そこから信頼を獲得していました。これを自組織に置き換え、取り入れるべき部分は見習い、実行に移していきたいと思います。

【2. 行程のデザイン】

目標に対して、どのような戦略でグランドデザインしていくのか？戦略がなければ持続可能な組織運営に繋がりません。そのノウハウの伝授を今回の研修では様々な事例を通してヒントをいただきました。

「人材育成」・・・組織を動かし発展させていくためには、やはり専門家の存在を強く感じました。日本にはトータルでみる環境人材育成機関や制度が整っておらず、若い人材の流入が難しく、専門家が育ちにくい現状です。このことが大規模かつ強いNPOが輩出できない原因の一つとも思います。NPOが社会を変えていく存在になるための人材育成のしくみを、今後はこの研修生ネットワークを通して考えていきたいです。将来、この「海外環境ボランティアリーダー研修」の研修生になることが一つの大きな“ブランド”として社会に影響を与えているような制度（しくみ）づくりに繋げる事が出来たらと思います。

「広報」・・・NABUのラインランド・ファルツ州広報官ライナー氏は、1年前から年間イベントの計画を策定し、アナウンスしていたり、広報物においては高いクオリティ、真実性、ストーリー性などを求め内容を何百回とチェックした上で外に向けて情報を配信するという事でした。的確な対象者（顧客）への確かな情報を真摯に届ける、つまりは徹底したプロ意識を持ち、共感と感動というリターンを生み出すというしくみに繋がっていました。向き合う姿勢を見習いたいと思います。

「ファンドレイジング」・・・「団体もそれ自身が商品ですよ」ファンドレイジング研究所のMs. Helga氏の言葉です。これまで私たちは組織の安定した維持継続に向け会員や寄付を集めるために、目先のファンドレイジング手法やスキルばかりに目を向け、大事な相手の立場にたった意識が抜け落ちていました。団体という商品の価値を伝えていくためには、安易に手法やスキルに頼ってお願いするのではなく、顧客である“人”に対してこちら側がどういう団体で、何が出来るのか、何を提供できるのかという事を適切に“伝える”ことが出来なければ、そもそも寄付など相手に求めることは出来ないし、共感や共鳴は生ま

れないという事です。相手が大きな会社であったとしても、その窓口や決定権は担当者である“人”であり、一個人なのです。つまりは、どう人を納得させられるかであり、個人個人の人格を上げていく、プレゼンテーションスキルを上げていく、その先の手法として多様なメソッドを活用すれば効果が現れるという事です。今回の研修カリキュラムにおいてこの講義時間は大変奥深いものがあり、心の深い部分にまで伝わるものがありました。

【3. 地域のコンダクター】

今回研修期間中に、ドイツの個性溢れる地域環境リーダーたちにお会いしました。彼らに共通することは、身の回りに普通に存在する何気ないことやものを、本当に楽しく魅力的なものに変化させ、語れる人であり、何より自分が住む地域を誰よりも知り尽くし愛しているという点でした。彼らがいる地域はそれだけで豊かであり、これこそ地域のエンターティナーであり、これからの環境リーダーと感じました。

2. 研修を通して、日本の環境ボランティアリーダーを支援するために、どのような仕組みが考えられるか。

本当に短い期間でしたが、研修プログラムを通して、また日本各地から集まった7名の研修生同士との日々のディスカッションを通じたサジェスト、また研修からの気づきからこれからの次につながる what・how を考えました。

その1 海外研修プログラムを活用した冊子制作「ドイツに学ぶ環境地域づくり (仮)」

その2 大学と連携した環境人材育成講座の提供

その3 次世代を担う人材交流事業

その1 海外研修プログラムを活用した冊子制作「ドイツに学ぶ環境地域づくり (仮)」

セブーンイレブン記念財団主催「環境ボランティアリーダー海外研修プログラム」も今年で15回ということで、全国各地には、すでに個性溢れる60名余のリーダーたちが卒業され、各地域でドイツでの学びを活かし活躍されています。また、プログラム開始から15年という時を経て、これまでの報告書や訪問先等のデータの集積も膨大になっていると思います。今回、15回生として研修に参加し、各カテゴリー毎に多様な学びの機会をいただき、大変貴重な体験をすることとなりました。8日間の研修の記録は、今回だけでも膨大な量となっ

ています。研修最終日に参加メンバーでの情報共有とふりかえり作業をしましたが、時間も限りがあり、共有の総括も十分出来ないままこの報告書の提出、翌年4月にはリーダー会での報告会が予定されていると聞いています。研修中、カテゴリーの一つとして「人材育成」についてレクチャーを受け、改めて若い世代への教育や情報提供の機会が必要であると強く感じ、このリーダー会でのプロジェクトを提案しています。ドイツでは、国の制度として16歳～27歳まで1年間「環境ボランティア研修生(FOJ)」としてNGO等で研修を受けることができます。ドイツでその研修生たちにもヒアリングする機会があり、その効果を聞く事ができました。是非このよう制度が日本においても提供されることを望みますが、まず私たちリーダーとして出来る事を考えました。その一つとして情報提供できる冊子があればと思います。対象は、若者特に高校生や大学生等を想定し、学びの後には、国内外でのNPO/NGOへも関心を高め、進路や留学などの選択肢の一つとなることを期待します。研修プログラムは、「ドイツの環境事情」「NPO/NGOの活動事例紹介」「環境政策」「組織運営」「人材育成」「広報」「ファンドレイジング」「地域の自然保護活動」等とカリキュラムも多岐にわたっており、他にないオリジナルなツールとなると考えます。

これまでの貴重なデータを一旦集約・整理し、今後の人材育成教材ツールの一つとして編集し、今後高校生や大学等(※提案2の事業と関連)での講演時にテキストとして使用することも可能かと思えます。その際には、何かプロモーション映像のようなものも制作し、映像で紹介出来るともっとインパクトを伴うのではないのでしょうか。若い世代を巻き込むしかけとなることを期待します。

その2 大学と連携した環境人材育成講座の提供

前述した提案事業により作成した冊子を有効に活用するため、また人材育成という目的に向けた実践として、大学と連携した環境人材育成講座の提供を考えたいと思います。

これまで述べてきたとおり、15年にわたる「環境ボランティア海外研修」の成果として、日本全国各地域に、高い専門性をもったリーダーたちがそれぞれのフィールドで環境活動をしています。このリーダーたちと大学(大学生)が連携したプログラムの実施が可能ではないのでしょうか。例えば一つの例として、大学では、1年時2年時には一般教養科目の履修があり、最近ではこのような一般教養科目のなかで、「学際科目」のように、少し自由度のある履修科目もあります。大学の講義に、外部人材としてNPO等がその地域での活動事例などを講義するといった事例もだんだん増えてきているようです。出来れば、このような機会を利用し、次世代を担う人材の育成分野で、環境ボランティアリーダ

一が活躍できる場づくりを行い、地域の大学と NPO との協働の事業が構築していけたらと思います。数年後社会人へと進むにあたって職業の選択肢の広がりやその後の進路への一助となる事もあると思います。このような講座を実施するにあたり、テキストあるいは教材ツールとしての冊子作成を、上記にて提案したものです。ドイツの学びを今後の実践へと繋がるプログラムづくりを企画していけるのではと思います。

その3 次世代を担う人材交流事業

今回ドイツにおける2大環境 NGO「BUND」「NABU」の事務所を訪問し、その活動について話を聞く事が出来ました。数十万人という会員規模を持つ両団体には、活動を次世代に継承していく準備として、ユース部門があり、独自のユニークな活動を展開していました。これからの持続可能な社会づくりを考えた時に、日本国内だけでなく、国際的な視野をもって、地球環境保全活動を考えていく必要があります。環境ボランティアリーダー会には、30歳以下の若いリーダーの活躍がありますので、出来れば BUND や NABU のユース部門との人材交流事業を企画してはどうでしょうか。何かテーマをしばってお互いに交流していく、或は、共通なテーマをもとに相互に研究していく等内容は様々企画も出来ると思います。何か日本・ドイツで協働プログラムへと発展していければと思います。

3. 全体を通しての感想

今年人生半世紀、孔子の論語を引用すると「知命＝五十にして天命を知る」を迎え、いつもと違った想いで誕生日をむかえました。そのひとつの区切りとして新たな指針に向かって自己を奮い立たせるための大きなチャレンジでもありました。まずは研修を無事終える事が出来ほっとしています。研修の凝縮した時間の中で、許容範囲をオーバーする位たくさんの事を濃密に提供していただきました。その中でも私の心に強く響いたのは、ドイツで出会ったたくさんの環境パイオニアたちです。それぞれが自分の地域で、生き生きと活躍する姿に国境を超えた感動を頂きました。これからは一地球市民として、また地域リーダーとして、真に一人一人が心豊かで幸せな暮らしが実感できる社会づくりにより一層邁進していきたいと思います。

最後に、15期生のメンバーの皆さん、お世話になりました。この貴重な出会いは宝と思っています。15(一期)一会の精神で7名の力を今後も結集し、デモクラシーの風をおこしていきましょう。